會報

昭和九年六月 | 36 | 日本山岳會

山岳文學を想ふ

荒井道太郎

大部分の登山家の文章はなぜかうもなつてゐないのだらう、さうした嘆聲が到る所で屢々響く。して見ると、所謂山岳文學の成立とか樹立とかいふことは、山がひどく好きな私達にとつて、竝びにまた、概してその全體の構成が戯曲のそれに相當似かよつてゐる登攀行爲に依つて兎角詩人的ないゝ氣持ち（但し、此の氣持ちこそくせものであらう）を懐かされ勝ちな登行者一般にとつて、どうやら一のプロブレムである、と同時にまた或る程度までクウエスチョンでもあるらしい。

山岳文學的な作品を制作し、かくして差し當り海洋文學や都會文學やに對抗し得るものを樹立してゆくといふことは、私達にとり、ひどく樂しく、野心的な仕事であるには違ひない。そこで、亦おそらく、回想といふ心理作用が、嘗つては登攀の實踐に依つて醉ふことを得た私達を再び、しかも一段と夢見勝ちにするであらう。私達はいゝ氣になつてペンを動かす。だが、待ち給へ、そして少しは懐疑的にさへなつた方が宜しい。ひとかどにピッケルを操り、ザイルをさばき得るといふことは、必ずしも常に、ペンをも亦巧みに操り得るといふことの前提とはならないからである。山へ登るといふことゝ山を愛するといふことゝは本質的に相違したものだ、と言つた人があるが、私も、山へ登る事と山に就いて書く事とは殆んど別種のアルバイトだ、と述懐したいのである。此兩者が何とか照應合致してゐる登山家の手に依つてのみ、どうにか讀める物が作られてゆくのではあるまいか。

と考へると、更めてみづからを省るまでもなく、山岳文學の名に値ひするものを制作することは、一般の登山愛好者にとつては、明かに、此の點のみに於いても、太く黑々としたクウエスチョン・マークが置かれなければならないやうな現況である。つまり、それは、制作者の側に於ける技術的缺陷の問題である。が、此の際序でながら、文學の一型種としての山岳文學のことを想つて見なければならぬ。山岳文學は、描寫される主體的對象が稍々特種なもの、非人間的なものであるから、少くともそのジャンル（種別）の點に於いて、他の文學の場合よりも、より多く制限を受けずにはゐられないであらう。かうした點に關しても亦、山岳文學の上にクウエスチョン・マークが置かれるのである。嘗つて「山岳」誌上で田部重治教授が。抒情的作品（卽ち詩歌）こそ將來に於いても山岳文學の主座を占むべきものであらう、といふ意味のことを說かれたが、これは遺憾ながら至言である。小說といふ文學をその本質から觀て、優れた山岳小說、眞の意味に於ける山岳小說が、各々テーマの變種と豐さとを誇りながら、多景に作られ得るといふことに對して私は尠からず懐疑的である。

けれども、山岳文學が文學として眞に生き得ることを許をれる路が詩歌と隨想及び文學の域に肉迫したりポートのうちにしか見出だされないとしても、私達は許されたその範圍に於いてそれ〴〵に可能な努力を積み重ねることを忘れてはならぬ。それは正に私達の上に課せられたプロブレムであるからだ。

それでは、私達は如何にして此のプロブレムを解いてゆくべきであらうか？此處に謂ふ「私達」が常習登山家もしくは山岳愛好者である限りは、よしんばそのプロブレムを解くこと自體はそれ程容易ではなくともその解き方を示すことは極めて易々たるものである。それは、私達が、登山家としての自分と相竝んで作家としての自已を見出すことにほかならない。山のことを知つてゐるといふことは、その場合私達の身上である。登山家に依つて山岳文學がものされる場合には、彼等の作家的氣魄と意慾、作家としての技術的鍛練が然り單にそれ等のみが一切を決定する因子である。私は、此の認識を、甚だしい錯誤なきものとして、堅く懐いてゐる者のひとりである。

主要目次

山岳文學を想ふ　荒井道太郎　一
研究欄
發汗防止に關する一つの提議　戸塚武彦　二
日本アルプスといふ言葉に就いて　吉岡春之助　二
山の消息
帝釋山の紹介　永樂孝一　三
山小屋便り　三
會報報告　四
五月常例理事會　四
新人會員　四
第九回關西小集會　四
關西有志懇親會　四
新着圖書　四
會員寄贈圖書　四
會員住所變更　四
會員への御知らせ　四

研究欄

發汗防止に關する一つの提議

戸塚　武彦

一日中水に不自由しない場所ばかり歩くとは極つてゐないから、誰しもが山歩きに水筒を携行する。然し或る場合にはそれでも足らない樣な事がある。殊に夏の尾根歩き、岩登りと云ふ樣な場合には、勿論充分の水を携行する事は重量が許さない。そこで種々の方法が云はれてゐる事は誰も知つてる事である。例へば、朝、夜營地を立つ前に腹一杯飲んで置け、いや夜着いた時からウンと飲め、又は水のある所を通つたらその度毎に充分飲め（之は一寸疑問を持つが）雪をかぢつてはならない、等等、それでも我慢がならなかつたら口の中に例へば石を含んで、木の葉を嚙んで、更には梅干の話をしてと云ふ樣な妙な事まで、云はれる。更に必要な事は水分の缺乏に堪える修行をする事であると云はれる。

要するに水分の缺乏の起る原因は前記の供給不充分と云ふ事の他に、極度の身體動作、之に加へて夏期は氣溫の高い事が發汗を增す爲めである。呼吸氣の中から棄てられる水分も相當に上るだらう。人體は一方極度に尿の生成を減少して之を防がうとはするけれども。

今年の春、東京で開かれた大日本生理學會に於て一寸興味のある報告があつた。それは多年、發汗の生理に關しての研究を續けてゐる滿洲醫科大學生理學教室の仕事の內で次の樣な事實である。

室溫をうんと高めて置いて、その中に入つた時の發汗の分量を測つて見ると、色々な事があるが、水を多量に飲んで入ると、非常に增して來る（之は誰しもが、よく知つてゐる事實である）。水を飲まないでも汗は增す。所が、面白い事と云ふのは、約一%の食鹽水を（然も多量に）飲んだ場合には、汗が增さないと云ふ事實である。

之を山に應用したらどうであらうつまり水筒の中に約一%の割で食鹽を入れて携行したらどうだらう。

此際考へる事がいくつかある。先づ第一は、汗は減るにしても尿がそれだけ增したら何もならない。（實際食鹽水は尿を增す）。然し、尿は身體の中の充廢物を汗よりも良く棄てゝ呉れるから、同じ事であるにしてもその方が良からう。

第二は、身體動作に際して發汗の增すのは、動作に供つて發生する、過大の熱量を水分の蒸發熱として取り去るにあるのだから、發汗が減じたらかへつて、例へば、熱射病の如き物が起りはしないか。

第三は、鹽水ではかへつて飢渴の感が强まりはしまいか。

第四は鹽水は不味ではないか、嘔吐氣を起しはしないだらうか。この點については、例へばブイヨン、キューブの如き、味の素の如き、又は鰹節のだしの始き、調味と同時に榮養に役立つ何物かを混ずれば防げるかもしれない。食鹽水でなく醬油を以て味をつけても良いのだから。

以上學會を開いて思ひついた一つの提言、それは私達も實驗した上で再び何とか申し上げるつもりだけれども、丁度、之から夏山の季節になるから、會員諸兄も出來たらば御實驗下さつて、何とか御批評下さつたらば大變有り難いと思ふ。

日本アルプスといふ言葉に就いて

吉岡春之助

日本アルプスの名稱に就いては小島烏水氏の「氷河と萬年雪の山」の一八五頁より七頁の間に大體要領を得た記述がある。此中に「日本アルプス」の名稱は明治五年に來朝した英國人ゴーランド技師の命名なる事が書かれて居る。此事は昭和五年八月松本で開かれた文部省主催、日本山岳會のお歷々を講師とする登山講習會に於ての武田博士の講演中にもあつたから、定說と見られて居るらしい。

頃日植物文獻刊行會で覆刻したシーボルドのフロラ・ヤポニカを開いて見て居る中、同書二五頁の始めに（シャクナゲの條）

"Cette belle espèce habite les alpes du Japon septentrional et se Trouue surtout abondamment dans les montagnes de Niko"

なる文句を見出して奇異の感に打たれた。此レザルプ・デュ・ジャポンは勿論今日謂ふ所の日本アルプスを指したものでは無く、ましてセプタントリオナルは北アルプスを指したものでは毛頭無い。然し此文句のある第一卷が出たのは一八三五年（天保六年）でゴーランドの來朝より三十六年前であり、又シーボルドが此文句の材料植物を手にしたのは一八二六年（文政九年）で、本書は之より稍古いツンベルジュの書を除けば明治維新前後に於ける日本植物に關する唯一の纏つた書であるから、植物に興味を有して居たゴーランドは恐らく手にした書であつたらう。

又本書の第二卷はミケルの手に依つて一八七〇年に出版された。ゴーランドが來朝の命を受けた明治四年の前年に當る。之も恐らく博物好きのゴーランドの旅囊中にあつたであらう。此第二卷にもアルプの文字が見へる六〇頁の中程に（ハイビャクシンの條）

"……croissant daus les Alpes de le province Nambou de l'ile de Nippon."

とあるのがそれである。此方はアルプが大文字で始まつて居るが、前のは小文字である。

此兩引用文以外の箇處では大抵モンターニュの文字が用ひてあつて、三千尺乃至四千尺と註記がある場合もモンターニュとあるから、レザルプは高山の意に用ひたもので、第一卷の方のは一般に本州中央部の高山地帶を指し、第二卷のは東北地方の高山地帶を指したものであらう。蓋し長崎を根城とする西歐人に取つては本州中央部はジャポン・セプタントリオナルであるからで、又ニッポンは本州のことである。

兎に角ゴーランド來朝以前に出た日本植物に關する有名な書中に、右の如く、譯してジャパニーズ・アルプス、日本アルプスに當るレザルプ・デュ・ジャポンなる言葉が使用されて居た事より考ふれば、當時日本植物の研究家が本州の高山地帶を指すに普通に此言葉を用ひて居たものと見てよからう。日本アルプスなる言葉其ものは、それ故、ゴーランドの創意とは認め難く、唯ゴーランドが其意味する地域を凡そ限定し、やがて彼自身及び彼の交友間に於て地理的名稱にまで轉移したと見るのが、妥當ではあるまいか。

追記。前文を「會報」へ送つてから、新刊のウォルトン師著「日本と臺灣の登攀記」が屆いたので讀んで行くと、次の節を見出した（二十二頁）

"It is believed that the term

Alpes was first introduced to Japanese mountaius by Professor Gowland of the Osaka Mint, though he waives his claim in favour of Mr. Weston."

之は小島、武田兩大先輩の御意見と全く同一である。此文の數行後に

"……but the variety of explanations may partly explain why there is a tendency in certain querters in Japan to apply the term Alps to mountains indiscriminately."

と記してある。シーボルトが日本の山にアルプスの語を導入したのは人情の自然であつたのであらう。

山小屋だより

六月十三日附高田營林署の通知によると、同署所管、『頸城山塊の高谷池宿泊所（山日記七七頁）は本冬の稀有の降雪のため倒壊し、使用不能になり、再建築の豫定なるも本年登山期には間に合はざる由、同方面に旅行せらる、會員諸兄は注意せらるの心要あると考へる。

（附）この種の通信を願ひます。

日本醫科大學山岳部
a. 東京市本郷區千駄木町
b. 戸塚武彦
c. 大正十四年
d. 九十名
e. 柚（一回）

山の消息

帝釋山脈の紹介

永樂　孝一

阪神間に介在して、あまりに有名すぎる程有名な六甲山への登路は、完全に開發されしかも機械化し、頂稜線に沿つて見事な自動車路が七分通り出來た今日に於て、猶僕等は華美な流行着裝の展覽會々場（六甲山）へ登らねばならないだらうか。否、六甲山へ關心を持つ者は眞劍な登山者といふよりも哀れな登山者といふ可きであらう。

自已の誇を他人にまで押し附けようとする人種に置き換へられた六甲の大道であり、疾走する自動車群の猛塵に曇る六甲山稜であるから、そして我等は何處へ行くか、

「靜かな山歩きがやつてみたい」この切な願ひの對象として、帝釋山脈は意義を生じる、高距に於て六甲山脈に及ばず、幽邃の感に於ても六甲に一歩をゆずるこの低い連々と脈うつ山、然し總てがありのまゝに近いといふ點で私等は帝釋山脈を愛する。一度登るときつと素晴らしい名もない峠を發見するだらう。靜かな流れをすい〳〵と泳ぎきる小魚を見つけるだらう。そして谷を下つて行くと原始的な丸木の一本橋が有つたり朽ちはてた倒木があつたり、まつたく、心持のよい小品の繪畫の觀賞の樣な氣がする。

漫然と心憎いまでの靜けさを嚙みしめるところが僕等の氣持にぴつたりくるのだ。帝釋山脈を遠く南方から眺めると一際雄大な山容をみせてゐるのが最高峯稚子墳山である。西方に並んで、帝釋山、丹生山、東しては、花折、金剛童子の二山を起す、その間に、志久峠梨木峠黑甲越等の路が、淡河、山田、兩川の流域に發達した村落を繫ぐ重要な役目を演じてゐる。

花折山（五七三・五米）に源を發した黑甲川は北流して淡河川に合する。帝釋山脈中最長の川である。以下帝釋紹介の意味で、黑甲越と、黑甲川に就て少しく記したいと思ふ。

帝釋山脈へは、神戸と有馬溫泉の間を運轉してゐる神有電鐵によるがよい。拾二月のはじめ街をはなれると霜が美しくきらめいてゐる。日本晴の空には冷徹の氣が滿ち心が緊張する。「谷上驛」下車、上谷上（カミタニカミ）より急坂に掛り一氣に「鰻の手池」に至る。

「鰻の手池」より眺めた裏六甲の翠綠には言ひ知れぬ想ひがこみあげてくる。僕等の山への情熱を守り育てた六甲山の容は遠くより眺めると、また限りなく懷しいものである。今はもう以前の六甲でなく、婦人、老人子供の六甲になつてしまつたのだ。けれどもこゝよりながめるとやはり六甲は靜かな六甲として見ることが出來る。「鰻の手池」より約三十分にして黑甲川の源流に渡された土橋に着く、少さな清い流だ。兩岸は密生した雜木、ラツセルよりも、水の中を歩く方がよからうと、きめて流に沿つて北行する。樹々の葉はまつたく落ち盡して水面を覆ひ岩を覆ひ、僕等三人は足の置場に迷つて、水音高く落ち込んだのも再三度であつた。冷さが骨身にこたへる雪を溶した水の樣な溫度だ。歩行は豫氣せる如く遲々として捗らない。第一の合流點（源流より數へて）より川のおもかげは一變した。水は白く躍り、少さい乍らにも瀧をかけ、また靑黑く、澱み、泡立ちつゝ矢の樣に流れた。そしてこのこましやくれた谷に手も足も出ぬ樣な場所すらある。

第二の合流點の東方半町餘りに、炭燒小屋がある。炭燒のおやぢは、まつたく好人物だ、僕等の作つた、ホットウヰスキーを飲んで、こんな美味いものは初めてだと喜こんでゐた。この四邊へ來る人は、大概獵が目的で、すごい鐵砲を擔ひで來るが鳥打ちは、からつきし下手で、その點、地下（里）（サト）の人は、ガタ〳〵の鐵砲でも、ドンと音がすると、きつといはしてゐる、といふ樣な事や、俺（ワシ）も貧乏して炭燒をやつてゐるが、少さな松茸山位ひ持つてゐるで、秋には是非遊びに來いだとか、春になると炭燒をほつて置いても蕨取りをしてもよいだとか、一時間半も雜談を交し、こゝの場所ではまだ一ケ年位ひ炭燒をやつてゐるといふ事を聞き再會を約して、再び川沿に北行する。

三度支流を合して後、川は平凡に復つた、里路に出て少時、金毘羅山よりそゝぐ支流に沿ひ、黑甲越に至る。午後三時すぎの雲一つ無い。人影のまつたく見えぬ峠路を辿ることに心から平和を見出す。左に古倉山の圓い頂を見、右に、東鹿見山の突起を仰ひでひたすら途をいそぐ、長大な裏六甲の全貌がみへる、そして六甲最高峯は茜に染めだされてゐるのだ『この山路を　このとき行くは吾れのみか　吾れのみかとて涙ながるゝ』富田碎花先生の歌が思出される情景だ、元の土橋へ辿り着いた。火を焚いて、溫まる、茶を沸かして早い夕食を取る、星が二つ眼に入つて來た、「鰻の手池」は素通り、下谷上へ急ぐ、村近くに炭燒く小屋があつたので晝にたのしく語り合つたおやじを想出す、いゝおやじだ、三人ともそう感じるのだからたしかなものそしてまた黑甲川を下りたいと思はせる存在だ。

低い峠の上でも
靜けさが展ろがると
孤高な山巔の獨居（ヒトリヰ）の樣に
たへがたい寂寥が襲つて來る
微風（ソヨカゼ）もない
松のざはめきも聽へない
こんな時には
底ひなき眞蒼（マツサホ）の穹の迫力が
苦しくなつてくるのだ
そして自然と開いた扉のうちに
赤裸な自分の姿が發見される
——凄然と

會務報告

五月十日定例理事會

出席者
高頭、冠、鳥山、横、松方、茨木
津田、神谷、福島、額田、黒田、

一、次回小集會の件
一、會報印刷所變更に關する件
一、關西在住理事に事務分擔の件
一、山小屋敷地、視察のため六月上旬横額田角田出張の件
一、新入會者の紹介者に對する入會挨拶の件
一、會計報告

第九回關西小集會

昭和九年二月二十一日午後七時
大阪堂ビル　清交社
講演　山岳スキーの進歩に對し山岳家に警告す。
高橋　健治氏
映畫　冬の樺太及北海道、カナダスキークラブのジャンプスキー
會費　貳拾錢

講演概要　山に於て如何にスキーを使用するか、ステムボーゲンとステムクリスチアニヤの用法、等漫談的講話あり。形だけのスキーを學ばずリズムとバランスに充分心懸けて練習すること、何々派スキー術などの流行に捕れず、山へ行く爲のスキーであることを忘れてはならない、そして自分に適應した滑り方を工夫すべしとむすび、氷、岩の技術に及んで一時間餘で終る。

映畫　冬の樺太と北海道共に高橋氏の撮影せられたもの、北海道の寫眞では高橋氏のスキーのホームをかなり丁寧に寫されてあり、前の話に關連して興味深く見る事が出來た。續いて會員二木信次氏の撮影せられたカナダスキークラブのジャンプの寫眞を映寫、同氏の懇切な説明があつた。（津田）

來會者氏名（順序不同）

前澤利成　西岡一雄　坂岡奈保志　山口季次郎　松岡靖一　服部鑛一　津田周二　高橋健治　頭井豐次郎　梅津猛　阿江正造　別所史郎　二木信次　阿部三郎　政友巖三　下川友記　宮崎武夫　藤木九三　下山勇　中村勝郎　影山寅造　永井俊三　大中彰一　米澤政吉　田中薫　中江喬三　石原正直　加納一郎　西口久一　外會員外四十二名

關西有志懇談茶話會

日時　昭和九年五月十八日
場所　大阪堂ビル清交社別室

關西に於ける會員の會合は年三回の小集會に止り、殆ど顔を合せる機會がなかつた爲、親睦會的な會合を希望せられる會員もあつたので、試みに、何のテーマも持たない、そして各自大いに氣焔を擧げられる會合を催して見た。古い會員、新しい會員、遠くは姫路からも來會者あり、肩のこらない一夕を愉快に過す事が出來た。初對面の來會者も多かつたので先づ自己紹介、續いて各自の希望、意見、又は最近の山登りの失敗談等に花を咲せた。此の種の會合を少し宛趣きを變へて、二、三回續けばお互ひに親しみを增し、益々愉快な會合にする事が出來るだらうと思ふ。

希望意見では、ルーム設置の希望依然最も多く、圖書室の設置等、形の上の中心がある事は、心强さと親しみを增すものではないか、とあり又牛鍋をつゝいて歡談出來る樣な會合、又は有志が集つて、附近の山へのヴンテルンク等、希望意見百出、十時半散會した。（津田）

出席者
石原正直　河本俊彦
大野英一　若城豐次郎
栗野英治郎　山村功
米澤政吉　西口久一
中原繁之助　形山寅造
中江喬三　加納一郎
宮崎武夫　坂岡奈保志
津田周二　杉岡靖一
杉山良平　大中彰一
山口季次郎　中村勝郎
兒島勘次　井上仙之助

新着圖書

五月—六月號

山　梓書房
野鳥　同
ケルン　同　朋文堂
登山とスキー　同　黎明社
ツーリスト　同
ジャパン・ツーリスト・ビューロー
山小屋　同　朋文堂
田部重治著　紀行と隨筆　大村書店
山の巡禮　第七　關東岳愛會
地學雜誌　五月號　東京地學協會
寫眞月報　六月號　小西六本店
山嶽　第七號　大和山岳會
山ある記　第九號　藏前山岳部
旅行　五、六月號　東京旅行クラブ
旅　同　東京アルカウ會
旅路　同　關東旅行クラブ
山　同　横濱山岳會
山彦　同　東京山彦山岳會
山旅　同　八王子山岳會
アルカウ趣味　同　日本アルカウ會
旅　同　東京曉山岳會
山と溪　同　山と溪の會
黑木立　第九八　關東岳愛會
京都山岳　五月號　京都山岳會
山行案内　同　昭和マウントクラブ
獨立樹　同　東京山旅クラブ
せふり　同　福岡山の會
山幸　三—五月號　阪神山岳會
管見錄　四—五月號　大阪管見社
廣島山岳會々報　五、六月號
武藏山岳會々報　同
明峯山岳會々報　同
奥多摩山岳會報　同
RSC部報　同
臺灣山岳彙報　同
東京登歩溪流會報　五、六月號
山人會々報　同
日本登高會報　同
魚市場山岳會報　五月號
三越體育會山岳部報　同
白樺會々報　同
OSCタイムス　四月號
AAC會報　六月號
GRK會報　三〇、三一
丸善山岳部報　二四

土佐女學校報　一冊
旅の趣味　六冊
大阪ミテコー會
ジャパン・ピウアク・スキー・クラブ會報　四月號
東京みなかみ會報　四、五月號
The Alpine Journal Vol. XLVI No. 248 May 1934
The Himalayan Journal Vol. VI 1934
Natural History Vol. XXXIV No. 3 May/Jun. 1934
Appalachian Mountain Club Bulletin Vol. XX No.2 May 1934
The Mountaineer Vol.XXVI No.6 May 1934
Mountaineering Journal Vol. 2 No.2 Mar./May. 1934
Trail and Timberline No.186/187 Apr./May 1934
The Prairie Club Bulletin No. 235/236 Apr./May. 1934
Ladies' Alpine Club Year Book 1934
The Scottish Mountaineering Club Journal Vol XX No.117 Apr. 1934
La Montagne No. 257/258 Mar./Apr. 1934
Himalaja Bibliograpgie 1801/1933
Die Alpen No.4/5 Apr./May 1934
Svenska Turistföreningens Tiding Nr 3/4 Apr./May 1934
Butlleti del Centre Excursionista de Catalunya Any XLIV Num. 463/467 Feb./Abril 1934
Club Alpino Italiano No.4 Apr. 1934
Planinski Vestnik Leto 1934. Stev 4/5
Unione Ligure Escursionisti No.4 Apr. 1934
Revue Alpine No.295 1er Trim. 1934
Svenska TuristFöreningens Arsskrift 1934
Svensk Turistkalender 1934

會員寄贈圖書

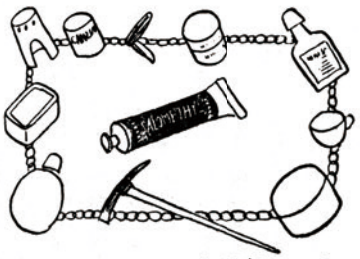
續宗像沖の島雜記　鳥第二卷拔刷　以上　竹內　亮氏
國立公園協會編　山小屋建築設計圖案集　以上　額田　敏氏

「山日記」會員割引のこと

會員にして本年度山日記の購入希望者に對しては、山岳會事務室に保管してある殘部に限り、前號通り二割引と致す事となりました。至急事務所まで御申越願ひます。

頒配價　金八十錢　送料四錢

（備考）　現金取扱のこと。送金は申込と同時のこと。申込部數に制限なし。可成振替貯金を利用あり度。



山にはサロメチール—そは山岳家の常識です

初心者は申すまでもなく、著名なる一流アルピニストに到るまで、みんな熱心なるサロメチールの愛用者です。

地圖、登山杖、飯盒、食料品、水筒その他と共に健脚劑サロメチールは忘れてならぬ必需品です。出立前にその有無の調査を怠らず實行なさることです

疲れ止めに……打身、捻挫の救急に……蚊ブトその他毒虫の螫傷に……用途廣汎

山岳寫眞の大福音
さくら赤外線フヰルム
近々市場に出現せん

國產カメラ及材料製造の先驅者たる東京六櫻社近年の發展振りは特に目醒ましいものがあるが、今回又々本邦としては最初の赤外線フヰルムの研究を完成し愈々七月初旬から發賣することになつた、時節柄登山季節に當つて山岳撮影家には無二の福音であらう、サイズはロールではヴエストとB二號、パックではアトム、名刺、手札、九×一二の六種類であるが、値段は大體さくらクロームの四割高になる見込である、尙仄聞するに同フヰルムの性狀は概ね次の通りである

一、波長七五〇m.u.（ミュミュ）に最大感度を有する爲め露出の條件として最も理想の赤外線フヰルムである
一、標準的な撮影條件を例示すれば一般遠距離撮影の場合F四五にてラッテンA又はFフヰルターを用ひ1/50乃至1/100秒の露出で良好の原板を得らる
一、赤色フヰルターを用ひず其の儘で或は黃色フヰルターを用ひた場合パンクロに類似の感色性結果ある爲め夜間撮影に好適
一、遠距離撮影用以外、例へば顯微鏡赤外寫眞撮影又は白晝に於て夜景の如き効果を得る撮影、雨天撮影用にも好適
一、現像仕上げは總てパンクロの場合と同じ

新着圖書紹介

Peaks and plaines of Central Asia
by C. F. Schomhug

一九二七—九年、一九三〇—一年の兩度にわたるショーンベルクの中亞紀行。原色の寫眞は優れてゐる。

The Naked Mountain
by Knowlton

一九三〇年ナンガパルバット遠征の一員としての記錄。寫眞もきれいである。

The Early Jesuit Travellers in the Central Asia. by Wessels 1924

一六〇二年—一七二四年の間にヒマラヤを初め中亞地方を歩いたヅュスイット僧侶の珍らしい文献。

Minya Gongkar by A Heim 1933

中華民國の西藏調査團と共に支那チベットのミニア、ゴンカールを中心に歩いた記錄、この地方の紀行としては珍らしいもの。

First Over Everest.

ホーストンのエヴェレストの航空遠征。

Buddists and glaciers of western Tibet. by Dainelli

伊太利語よりの英譯。ダイネリの一九三〇年のカラコラム紀行である

Mannel d'Alpinisme. C. A F. 編

D.ÖUAVのアルピネス・ハンドブークの向ふをはつた譯でもあるまいが、フランス山岳會からこんな本を贈られた。內容はA・Hに似たやうなものらしいがフランス語が分らないので手が出ない。(T・K生)

FIRST OVER EVEREST
The Houston Mount Everest Expedition 1933
Pub' by John Lane the Bodley Head London

一九三三年四月に敢行されたエベレスト峯探險を目的とするヒューストン飛行隊の報告書は、色々な意味で、その上梓を期待されて居た。

先づ何よりも、前人未知のエベレスト峯附近の紹介、味に撮影された寫眞に依る說明が地理學者、登山家を問はず一般にさへ期待された。そしてその結果は當時の新聞紙上にも一部掲載された通り、物凄い南壁の神秘を明かにする に役立つたことを始め、小湖水の存在其他新しい發見を提出して、吾々を驚ろかせるに充分であつた。

第二に飛行技術と、それに關聯するエベレスト上空の氣流其他も、エベレスト登山隊に關心を持つ人々の等しく興味を持つ處でめつた。事實時速百十餘哩の激風の內で、操縱の勞を採つた人々の感想なり、六哩にも渡つて、なびく、あの雪煙の上を飛んで、それが單なる、積雪が風に吹散らされるものではなく、激風の起す特殊な作用ではないかとして科學者の研究をうながす等、それは登山家にとつても興味ある記述を提供して居ると考へられる。飛行技術の詳細、並びに飛行地圖撮影技術の脫明等が夫々の研究家を益することも多大であらうことは疑ひない。

第三にこの書の出現が待たれたのは、探險隊の撮影にかゝるエベレスト峯の寫眞の內、曾ての登山隊員や地理學者等から疑問符を附せられて當時英獨のジャナリーズムを賑した問題があるため、果して、この書の發行に依つて、夫等の寫眞が如何に發表されるかといふ興味であつた。

處がこの書では、何のこだはりもなく、その寫眞があつさりと訂正されて、大體專門家達の意見通りになつて居て、それに關する辯明等は一言も附されて居なかつた。ひどく淡白な訂正である。それによると、新聞紙上に發表當時「エベレスト峯西北側から撮影せるもの」と記された線物凄い山稜が中央を上下に走る光彩の寫眞はエベレスト方面から撮影されたマカル峰であると訂正され、又「登山路に添つて眺めたエベレストの東北山稜。前景の氷河上には一九二四年の登山隊がキャンプを張つた。」とタイムス誌上で說明された寫眞には「エレベスト峰上空から見たチャムラン山稜の西端」といふ訂正が行はれて居る。

何等かの論爭を、內心期待した人達にはいさゝか物足らぬ降伏振りではあるが、事實を正直に是認して訂正する態度は、かくあるべきが當然なのかもしれない。

こんな次第でこの書は色々に興味を持つて見ることが出來る。エレベストへの二回の飛行カンチェンヅャンがへの一回の發行記は吾々に相當愉快な、壯大な想像を展開させて呉れるものだ。名文ではないが、當事者の感激が簡單に記されて居る。

飛行記の外、一八二三年より一九三三年に到る百年間のベベレスト挑戰史といふ一章があるが、往時の測量史等を主とするもので、まとまつて居る點、有益でもあり、興味もある。今度の探險隊にオヴザーバーとして主要な役割を務めたスムユワート・ブラッカーがヒンドスタンの地圖の最初の完成者であり、エベレスト實測の景運を醸成した人であるヴアレンタイン・ブラッカー(一七七八—一八二六)の子孫であることなどが記されて居たりする。

一歩一歩苦しむ登高を續ける登山隊に比して飛行隊はあまりにも、短時間に、處女峰の上空を獲た。科學の戰士達の苦勞は恐く登山隊同樣に多いであらう。

しかし吾々は矢張り、地上の登山隊が話つて呉れるだけの、親しみ易い山の物語を之等の人達から聞くことが出來なかつたやうな氣がしないでもない。書物の性質上でもあり、探險隊形式の相違上からも無理のないことかもしれない。この點は殘念だが、想像力を充分に持つ登山家達は恐く、この豐富な寫眞と、實際に處女峰上空を飛翔した人達の語を土產話とから、限りなき想像の翼をのばして樂しむことは出來る筈である。

(島田巽)

× × × ×

登高會々報

第一號 (非賣品)
昭和九年三月

慶應の山岳部の出身者から成る登高會が新しく會報第一號を發刊した昨年會則を決定したこの登高會は、その傳統並に組織に於て何等前の會と異る所がないが、その新しい第一歩として年一回、會報を發行することになり、これがその第一號であるそれは他面、從來發行の「登高行」が三、四年に一回といふ現狀に於て先輩と現役との連絡を一層深からしめる意味を有つてゐよう。詳細な紹介は之をさけ次にその主要目次のみ掲げて置く。

發刊の辭、スキー合宿の指導者に與ふ(片山氏)、秋二題(早川氏)。雜錄—槇、早川、三田、本鄕、其他の各氏。(T・K生)

事務所から

□住所の變更は御通知下さい。

□會費お拂ひ込み未濟の方はなるべく早く願ひます。

□「山岳」バックナンバーは本號廣告頁御參照下さい。

□會員通信は事務室內會報掛宛に願ひます。

國立公園に立つ山小屋建築設計圖案集

昭和九年三月十日發行　國立公園協會、建築學會　四六倍版四〇頁　定價五〇錢。

昨秋國立公園協會並に建築學會にて、國立公園候補地内に建設すべき山小屋の設計圖の懸賞募集を發表した事があり、本書はその應募中より當選せるもの四、等外佳作五の設計圖を收錄したものである。そして各案には假定建設地及材料構造設備等に關する説明が附記されてゐるので山小屋を研究する者にとつては非常に興味あるものと想ふ。

一等當選は建築學會正會員　間野貞吉氏の作にで、假想地點を白馬頂上小屋附近としたもので、乙型一階建にて建築面積は地階とも一八七、五平方米、收容五六名、建築費三、三〇〇圓、其他等外佳作にて槍ケ岳殺生小屋の位置を假想した案もある。

我々としても國立公園内たどんな山小屋が建つかといふ事に就ては大いに關心を抱くもので、特に山岳地帶に建つものに於て然り。本書中に收錄された設計圖は皆外觀といひ、内部の間取りも從來の山小屋より遙かに優れる所があり、上高地とか十和田湖等の森林帶に設けるには適してゐるやうに想ふ。强いて例を擧げれば上高地の帝國ホテル又は霧ケ峯のユッテを想はせる傾向のものが多く入選してゐるが、日本アルプスの高所に建てる場合及び今日の日本の山小屋利用者の立場を考慮に入れると尙實際問題としては研究の餘地が大いにあるのではなからうか。

この問題に就ては更に詳細に建築の專門家と山岳家とが膝を混えて檢討する價値は充分にある。

（角田吉夫）

紀行と隨筆

田部重治著

四六版二百九頁　布表紙

大村書店發行　定價一圓二十錢

昔つて、「日本アルプスと秩父禮巡」一卷によつて、山の淸い相をつたへた著者の著書を、また、一册書架に得たことは心嬉しいことである折に觸れ時に應じて執筆された紀行と隨筆を集められたものであるが、一卷として讀直せば、興味更らに深きものがある。

山を想ふ人に語らはうとする著者の序から數行を引用してみよう「本書には、著者が今迄に公けにした此種の著述以上に多くの隨想や論文がはひつてゐる。時には可なり似よりの隨想が見出れるかもしれない。しかの著者の山に對する態度や感情は最もよく是等の隨想や論文に現れてゐると云ふ自信をもつてゐる。」

前號訂正

別所　梅之助

只今おつかはしの會報中の拙文「利根川べりの堤を築くとき砂を入れると、土手が崩れぬ」といひは、「崩れる」といふと書いたものです私がかきまちがへなかつたといひきれませんが、砂を入れるのを利根川あたりで見つけられると、嚴しい罰をうけるものですから、次號にお正し下さいまし。

五月二十五日

編輯後記

會員諸賢の厚志により會報の内容は御覽の如くに充實して來た。誠に御同慶に堪えない。この上とも益々御投稿を願ひたい。唯、恨むらくは編輯委員俗務多忙のため、發行の後れ勝ちなること。各位の御諒承を願ひたい。

昭和九年六月十七日印刷
昭和九年六月二十日發行

發行者　額田敏
編輯兼印刷人　福島昌夫　東京市芝區琴平町二（不二屋ビル）
發行所　日本山岳會　電・芝・六一四九番
廣告一手取扱　進恒社　電・四谷・一五六番

（多木印刷所印刷）

田部重治著【最新刊】

紀行と隨筆

四六判布裝函入
定價壹圓貳拾錢
送料拾錢

内容□山岳文學に就いて□蓼科の高原□上高地附近□上高地禮讃□白駒池□山と人生□登山の態度□冬山□自然の見方□冬山の光景□隨想□烏帽子岳より中ノ湯まで□奥秩父の山々□紅葉の旅を想ふ□野澤の想ひ出□樂しい登山の想ひ出□山の產み出す力□山の隨筆□山の町□紅葉を想ふ□その頃を追うて□飛彈の山□冬の旅□登山の概念□小菅川より大菩薩峠へ□府下の山々□秋の旅□多摩山より秋川へ□冬の霧ケ峰□秩父の思ひ出□新綠のあこがれ□

田部重治著　峠と高原（普及版）　價一・〇〇　送一・一〇
角田吉夫著　上越國境　價二・二〇　送一・一四
黑田正夫著　登山術　價二・〇〇　送一・一四

發行所　東京市小石川區武島町　振替東京四六九七五　大村書店

フアルトボートもて

海に戯れ 川に挑め

フアルトボート スポーツ

感激と興奮と緊張との素晴しいトリオに陶酔出來るこのフアルトボートスポーツこそ新時代を表象するスポーツです。
大氣と太陽 健康と生活への緊張力に對する憧憬はこのスポーツに依つて手易く滿足出來ます。このボートの特徴は字で示す樣に何處にでも持參組立てられ樂しまれる點で、神祕の影宿した湖沼で舟を滑らすのも、激流岩を噛む川での挑戰も、限りない太洋での帆走も思ひの儘エンジョイ出來るものです。その味ふ愉悦感はスキースポーツに勝るもので正に冬期以外に於けるスポーツの王者として誇り得るものです。新時代の若人に、あらゆる希望と幸福とを無限に有するこのフアルトボートを捧げます。

神田 小川町 **美津濃** 銀座 五丁目

1人乘 ¥195.00

1人乘 ¥225.00

OSAKA TOKYO KOBE KYOTO NAGOYA

「山岳」バックナンバー

Vol.	No.	定價	送料
4	1	¥2.00	6
〃	2	2.00	〃
〃	3	2.00	〃
5	2	1.00	8
〃	3	1.00	〃
6	1	1.00	〃
〃	2	70	〃
〃	3	70	〃
7	1	1.00	〃
〃	2	1.00	〃
〃	3	1.00	〃
8	1	70	〃
〃	2	70	〃
〃	3	70	〃
9	1	70	〃
9	2	¥70	〃
〃	3	70	〃
14	2	50	8
〃	3	50	〃
15	2	50	6
〃	3	50	〃
16	2	50	8
〃	3（奥上州號）	50	〃
17	2	50	6
〃	3	50	〃
18	1	50	〃
〃	2	50	〃
21	2（黒部號）	50	8
23	3（臺灣號）	50	〃

日本山岳會

東京、芝、零平町一、不二屋ビル307號・振替口座東京四八二九番